

以森伝心

No.

51

前理事長 柏原康夫 筆

京都の森を守り育てる運動に参加しませんか

巻頭特集

開かれた森から、 新たな価値を

京都大学フィールド科学教育研究センター

芦生研究林 林長 石原正恵



- 京都の森の仲間たち
特定非営利活動法人 加茂女 (木津川市)
- 企業参加の森林づくり
- 森の出前授業
- 活動報告

開かれた森から、 新たな価値を

京都大学フィールド科学教育研究センター

芦生研究林 林長 石原 正恵

京都丹波高原国定公園の特別地域にも指定され、原生的な自然が残る生物多様性が豊かな南丹市美山町芦生の森。植物だけでも1,000種以上が確認され、そのうち約200種は京都府レッドデータブックに掲載されています。「植物学を学ぶものは一度は芦生演習林を見るべし」と言われてきたこの地で、芦生の森の変遷と向き合う京都大学フィールド科学教育研究センター芦生研究林の石原正恵林長にお話を伺いました。

京都大学農学研究科博士後期課程修了後、東京都レンジャー、自然環境研究センター研究員、広島大学デミュー・トラック講師等を経て2016年より京都大学フィールド科学教育研究センター准教授。2018年より同センター芦生研究林林長。

森で木々と向き合った学生時代

子どものころ、親の仕事の都合でアフリカに住んでいたことがあるんです。そこでの人々の生活を目の当たりにして、アフリカの農村の貧困や環境問題について解決したいと考え、熱帯についての研究ができる京都大学農学部に入學し、そこで指導教官となる菊沢喜八郎先生に出会いました。

先生は当時ここ芦生で樹木の研究をされていて、木を下から眺めているだけではわからないと、20メートルくらいのやぐらを木のまわりに組んで、そこに登って木を観察する、ということをされていました。私もそのプロジェクトに参加し、一本の木がどのように芽や花を付けたかを一枚一枚数えていく、というなかなかマニアックな作業をずっと続けていました。

そこで知ったのが、木もそれぞれに個性があるということ。大木と若い木でも違いますし、同じことを繰り返しているように見えても、年によって花の数も枝の伸ばし方も違ってくる。春先、植物が活動し始めるとき、葉っぱを一気にばっとう出す樹種もあれば、徐々に芽を伸ばしてくる樹種もある。私はミズメという木を研究していたのですが、同じミズメの木でも個体に



芦生研究林の事務所にて

よって成長の仕方が全然違うということもわかってきました。人間も、若い時と、我々くらいの時と、おじいちゃんおばあちゃんになったときと、生き方

はそれぞれ違う。人間とはまた違う次元ですが、木もそんなふうに生きざまが違っていて、さらに丁寧に見ていくとそれぞれがどんな成長をしてきたかもわかるんです。

例えば一本の木を前にしたとき、この木は100年以上前からここにいて、日本人が戦争で大変だった時期なんかもここにこうしてじっとしていたんだな、と感じているうちに、人とは違う木の時間軸というか生態に魅せられていき、さらに深く樹木を学びたいと思うようになっていきました。

木々から森へ、芦生から全国へ

大学院に進学・修了し、東京都のレンジャーの仕事

を一年経験したあと、北海道大学の日浦勉先生からお声がけいただいて日本の森林の変化を解析する環境省の全国規模のプロジェクト「モニタリングサイト1000」に携わることになりました。これは北海道から沖縄まで各地の森林の調査サイトのデータを集積し、それらを分析して日本の森がどのように変化しているのかを明らかにするというもの。データ自体は各地の現場の担当者が集めてくれるのですが、データを解析する上で現場の森を知らないといけないので、可能な限り現場の森林も見て回りました。調査サイトは、北海道から沖縄まで、全国に及びました。このプロジェクトに携わるうちに、視点が樹木から森林全体へと移り、環境問題などにも関心がシフトしていきました。

生態系の中でも、昆虫などは変化がとても早いですが、樹木はすごくゆっくりと生きています。環境が変わってもすぐに枯死はしたりしないので、私が解析していた短期間のデータ上では劇的な変化というものは見えてきませんでした。ですが、後任の研究者たちが分析を続け、おおよそ10年くらいのデータが貯まってきたときから、日本の冷温帯と暖温帯の境界の森林で、落葉広葉樹が減って常緑広葉樹が増えている、といった現象が明らかになってきました。温暖化が進むとこうした変化が進むと予想されているんですが、それと同じことが起こっている。これが、温暖化そのものが原因なのか、または人の手が入らなくなって遷移が進み、里山から原生的な植生に移行しているだけなのかはわからないのですが、そういう変化が起こっているということはわかってきました。10年程度のスパンって森林の世界ではごく短いものですが、それだけの期間でこの変化が明らかになったのは驚きでしたね。

日本にはもっと長期のデータがあるので、その後も継続して期間や場所も増やして変化を見るという共同研究をしています。するとそれでも同じ傾向が出ていて、今度はもっと北の方でも同様に、亜寒帯の針葉樹が減り冷温帯の落葉広葉樹が増えてきているという結果が出ていて、全国的にこうした変化が起きているということがわかってきています。

再び芦生へ

その後広島大学での勤務を経て、2016年に京都大学フィールド科学教育研究センターに採用になりました。

た。初めは本部配属だったのですが、翌年から芦生研究林に配属になり、学生のころ過ごした芦生の森に、今度は違う立場で戻ってくることになりました。

京都を離れていた間も毎年芦生研究林を訪れて研究を続けていたので、芦生には通い続けて20年以上になります。学生時代に登って研究していた木がまだそこにありますから、「帰ってきた」という感じですね。ただ学生として研究のフィールドにしていたのと、職業人として組織の中で仕事をするのとでは全く違う。ここ芦生研究林では、十数名の職員が4,200ヘクタールの森を管理しています。彼らと一緒に林道整備や学生の実習対応、また変化していく森林のモニタリングといった業務を回しながら、どういう方向を向いていかないといけないのかを明確にし、中長期の計画も作っていく必要があります。

特に今は森がシカの食害の影響を大きく受けていて、いろんな生物が見られなくなったり、土壌保持や水質形成などの森林の働きにも影響が出ています。研究者や行政も一緒に取り組みは進めてはいるものの、芦生研究林全体の回復には程遠い状況にあります。芦生研究林では、保全活動としてだけでなく、シカの食害と森への影響が様々な研究者や学生によって20年も研究されてきました。

開かれた森で、人と森との繋がりを 通じ新たな価値を

芦生研究林は大学の研究林としては珍しく、土地が大学所有ではなく、地域との契約によって使わせていただいているもの。ちょうど2020年が、それまでの99年間の契約の更新のタイミングだったこともあり、私が赴任してからはこの研究林の存在意義や重要性を大学に訴え、また地域の方々の理解も得ながら、契約更新に向けての調整といったことも仕事になりました。

芦生研究林は、歴史的にも研究林自体が集落や地域の皆さんと一緒にやってきた、という面が濃くあります。地域の小学校に研究林の職員の子どもが通っていたり、地域のガイドの皆さんによるツアーが研究林内で行われていたり、シカの捕獲に



地域の方と一緒にトチノキを探す学生

取り組む行政や猟友会の人たちが参画されている協議会があったりと、研究林への入林者は教育・研究目的のほか一般のハイキング利用なども含め年間4,000人～7,000人に及びます。こうした開かれた研究林であるという関係を強みとして、研究者の輪や大学の中で閉じているのではなく、様々な人や組織とともに新しいものを作り出していければと思っています。

学外から広く寄付を募る「芦生研究林基金」が前任の伊勢武史先生を中心として創設されたのもその流れからでした。大学の予算も潤沢ではない中で、地域との関係性を強みに最先端の教育活動を展開していくのが我々の仕事です。

新たな連携という点では、2019年に京都モデルフォレスト協会の紹介で、KDDI株式会社さんから連携のお話をいただきました。自社の通信技術等を使って地域の課題を解決するプロジェクトとして、VRを使った教育コンテンツの制作や、それまで通信がほぼできなかった研究林内に無線通信技術でデータ通信が可能になる設備を設置いただき、鹿の捕獲檻のリアルタイムのモニタリングが可能になるなど、新たな連携が進んでいます。



防鹿柵を設置した際のKDDI(株)の皆さん

地域の知恵を学び、社会に普遍的なものを伝えていく

研究林に赴任になるまで、言わば根無し草のように定住地を持たず、多い時は年に2回引っ越しをするような生活をしていましたが、芦生に戻ってからは「ここに根を張る」ことを決めました。地域社会の中で暮らすという経験自体が初めてだったので、いろんなカルチャーショックを経験しました。都会だと「仕事と家庭」しかなくて、地域社会との繋がり是非常に希薄になりがちですが、ここは違います。一人の人が消防団や農事組合や地域社会の中でいろいろな役割を持っていて、まずそうした地域社会のあり方自体が新鮮でした。

地域で生活できたことは私たち家族の人生設計にも大きな意味を持ちました。美山に住んで7年目に突入しましたが、今ではこの地域が好きで、今後も住み続

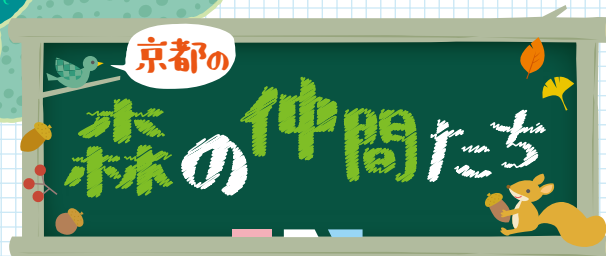
けようと思っています。人生で初めての定住ですね。

いろいろと失敗もしながら次第に地域の仕組みが見えてくると、これは面白いなと思えて来ました。ですが一方では過疎高齢化で年々失われて行っているものもある。同じ地域でも世代間でも変化は大きくて、おじいちゃんおばあちゃんとその子世代でも感覚が違おうし、孫世代にいたってはさらに違う。学校の広域化でお友達の家も離れていて、外を一人で歩いていたら野生動物に遭遇して危ないかもしれないし、お父さんお母さんも働いていて家にいないから、家でゲーム、となりがちで、田舎で自然に囲まれて暮らしていても却って自然体験が薄いなんていうケースもあったりします。

地域の人たちはすごくいろいろなことを知っておられて、それは研究者が持っている知識とは違う地域知や伝統知と呼ばれるものです。でもおじいちゃん、おばあちゃん世代が亡くなるとその伝統知も失われてしまうという状況に、今、問題意識を抱いています。そうした知恵を習得するのは困難ですが、記述して記録として引き継いでいったり、学生たちに地域の人たちと一緒に作業をしながらその知恵を学んでいってもらおうということも始めています。例えば、熊猟なども失われつつある地域知の一つです。昔の人たちがこの森の奥山でどんな森の恵みを採って暮らしてきたか、何を考えてきたかをとにかく残したいし、学びたいと思っています。

途上国からの留学生を指導することもあります。彼らの国は高度経済成長によって伝統や自然が失われつつある。芦生の森の歴史や現在の取り組みを通じて、経済やGDPを優先するあまり失われると取り戻せないものをどう守っていくか、大規模なインフラに頼るのではなく、これまで養われてきた森と人との関係のなかに、新たな価値を見出し、心の豊かな暮らしや文化の継承を生み出していく、そういう賢い選択や学びを持ち帰ってほしいと思っています。

学問の役割として、社会に普遍的なものを伝えていくという意味では、芦生の森を事例として日本の他の地域や世界各地の森が直面する問題に対して貢献できることがあると信じています。ローカルからグローバルへですね。そういうことも意識しながら、地域の人たちが気づいていない地域の良さも含めて、価値を再発見し、また新たに産み出していくことに繋げていければと思っています。



特定非営利活動法人 **かもめ 加茂女**
(木津川市)



京都府の南端に位置する木津川市は、京都や大阪、奈良といった主要都市からも程近く、ベッドタウンとして人口が増加傾向にあります。一方、市内を流れる木津川に沿って広がる平野部となだらかな丘陵地では、手入れがされない放置竹林が問題となっています。

今回は、この木津川市をフィールドに、放置竹林の整備に取り組まれている「加茂女」の皆さんの活動についてお話を伺いました。

—きっかけはニュータウン内でのつながりづくり

私たちの活動は、市内のニュータウンに越してきた女性同士で、地域でのつながりを作りたい、と集まりだしたのが始まりです。初めは子育てや生活の知恵をシェアするサークルとして活動していましたが、次第に「地域に役立つことをしよう」とアルミ缶の回収を始め、その収益を寄付するようになりました。

この取り組みは現在でも続いていて、毎回たくさんのアルミ缶が集まります。この活動の報告のため、広報誌「加茂女つうしん」を月1回発行し、3,000部以上を地域で配布しています。

—空き缶回収から放置された山林の現状を知る

活動を続けているうちに、手入れがされなくなり荒れ始めていた地域の竹林に、不法投棄がされるようになってきました。続いて産業廃棄物の埋め立て地設置の問題も立ち上がります。空き缶回収を通じて地域の環境問題に関わる中で、この問題も無視はできない、と向き合いましたが、「人が手を入れず山が荒れてしまうと、こんなことになってしまうんだ」と痛感させられる出来事でした。

そこから、「それならば自分達で山や竹林の手入れをしていこう」と、地域の放置竹林の整備を始めます。山の

ことについては素人でしたが、補助金などを活用しノコギリやチェーンソーなどの道具も揃え、徐々に参加が増えてきた地域の人達の力を借りながら、少しずつ手入れを進めてきました。

—持続可能な地域資源として竹の活用を



竹林整備で伐採した竹は、竹チップや竹炭づくりなどに活用するほか、「おやき」などの加工食品にして販

売も行っています。これもすべて会のメンバーが手作りしており、おかげさまで好評をいただいています。

竹は昔から食品だけでなく、カゴや食器など暮らしの道具としても使われてきました。今では石油製品に取ってかわられてしまいましたが、持続可能な資源として見直していくことが大切です。私たちも幅広い活用法を提案していければと思っています。

—竹林から広がる未来を次世代に繋げたい

人々が竹林に入らなくなっていくにつれ、竹林の整備は所有者にとって負担になることがあります。そうした竹林の整備を会として行うことで、所有者の方からの信頼を得て、整備エリアも広がってきました。山林を手入れすることによってわさびの自生地が広がってきたり、竹を使った倉庫や遊具なども設置してイベントを開催したりと、活動の幅も広がっています。

自分達自らの手で、身近にある地域の資源を使って何かを作り上げていくことは、これからの時代ますます重要性を増していくと思います。私たちのフィールドも、いずれは一般の人々が利用できるように整備していくのが夢です。個人個人ではできないこと、続かないことも、会として人が集まり、協力し合うことで可能になります。私たちの夢も、長い時間をかけて実を結んでいけばよいと思っています。



団体プロフィール

特定非営利活動法人 **かもめ 加茂女**

設立：平成元年

活動地：木津川市

活動概要：放置竹林の整備、竹や林産物を使った製品やビジネスモデルの開発、地域の若手農家と新規就農希望者のマッチングセミナーなど



企業参加の森林づくり活動報告



〈協会に送付いただいた活動報告より抜粋して掲載しています〉

4月 5日(木)	エルセラー化粧品株式会社	長岡京市
4月 8日(土)	グンゼ株式会社	綾部市
4月10日(月)	三洋化成工業株式会社、 一般社団法人三洋化成社会貢献財団	和束町
4月20日(木)	株式会社マツシマホールディングス	長岡京市
4月22日(土)	株式会社村田製作所	亀岡市
4月29日(土)	KDDI株式会社関西総支社	大山崎町
5月13日(土)	グンゼ株式会社 株式会社島津製作所	綾部市 南丹市
5月20日(土)	株式会社京セラ 公益財団法人日新電機グループ 社会貢献基金	京田辺市 南丹市
5月27日(土)	株式会社村田製作所 株式会社ドコモCS関西	亀岡市 宇治市
6月 3日(土)	サントリーホールディングス株式会社 三洋化成工業株式会社、 一般社団法人三洋化成社会貢献財団	大山崎町 和束町
6月17日(土)	エスベック株式会社 株式会社京セラ 三共精機株式会社、佛教大学	福知山市 京田辺市 南丹市



エルセラー化粧品株式会社



グンゼ株式会社



一般財団法人三洋化成社会貢献財団



株式会社マツシマホールディングス



株式会社村田製作所



KDDI株式会社関西総支社



公益財団法人日新電機グループ
社会貢献基金



株式会社島津製作所



株式会社京セラ



サントリーホールディングス株式会社



エスベック株式会社



三協精機株式会社、佛教大学

府民公開講座 2023初夏「森林整備体験と木材市場見学」

令和5年6月9日(金曜日)、京都市右京区京北において、府民公開講座2023初夏「森林整備体験と木材市場見学」を実施しました。当日は19名の皆さんにご参加いただき、「合併記念の森」において森林インストラクターの指導のもと森林整備の見学や体験をしたあと、北桑木材センターを訪れ、木材市場の施設を見学しました。



緑の募金「森の出前授業」

3月15日



京都市立金閣小学校
衣笠山(京都市北区)

5月16日



北野幼稚園
同園観察林(京都市左京区)

この「森の出前授業」は、皆様からお寄せいただいた「緑の募金」を財源として実施しています。当協会では、森林体験活動の指導ができる人材を「森の人材バンク」に登録ご紹介しています。実施を希望される場合は、事務局(巻末参照)までお問い合わせください

5月20日



衣笠児童館
京都北山杉の里総合センター(京都市北区)

5月25日



みざわ保育園
長尾山(亀岡市)

企業からの寄付による植樹・環境教育事業

2月17日



「平和の緑づくり」記念植樹
宇治黄檗学園(宇治市)

3月7日



キョーラク百年の森づくり事業 記念植樹
向日市立向陽小学校(向日市)

3月8日



キョーラク百年の森づくり事業 植樹・記念行事
こばとこども園(京都市山科区)

3月20日



中央倉庫協賛「春だ!森で遊ぼう!森の探検隊2023」
洛西散策の森(京都市西京区)

講座に参加して 伊坂 航

当日は天気も良く、子供の頃の遠足のようにワクワクした気持ちでバスに揺られて京北町へとやってきました。

間伐作業について、森林インストラクターの先生方から、切り始めたら下手へは立ち入らないこと、倒す際の声掛けが重要なこと、などの説明を聞き、知識としては持っていましたが、これを蔑ろにした結果を考えれば必ず守るべきルールだと再認識しました。また、「間伐を行うことにより日差しが地に降り注ぎ、周りの木々を活性化し、そこにまた新たな木が育つ。人の手によって次の世代へバトンを渡す手助けとなる」ことも教えていただきました。

午後に訪れた木材市場は、広大な敷地に大きな丸太が山積みされている光景が印象的でした。こういった原木を扱う市場は府内には2カ所しかないとのこと、たくさんのスギやヒノキが集められ、値がつけられ出荷されていく過程を想像しながら見学しました。京北へは何度か足を運んできましたが、今回のツアーでより深い部分まで知ることができました。自然との共生は山に暮らす人達の努力と根気によって成り立つもので、その精神の尊さを改めて感じる機会となりました。いつか親子で参加したく思います。

事務局からのお知らせ - 活動報告 -

令和5年2月

(株)平和堂に感謝状贈呈

株式会社平和堂様からの緑の募金に対し、国土緑化推進機構から感謝状が贈呈されました。

令和5年2月27日

京都北都信用金庫に感謝状贈呈

京都北都信用金庫様からの緑の募金に対し、感謝状を贈呈しました。



令和5年3月

京都府ホンダ会に感謝状贈呈

府内各店舗に設置いただいている募金箱への募金に加え、各販売店のハイブリッドカー販売台数に応じていただいた京都府ホンダ会様からの緑の募金に対し、感謝状を贈呈しました。

令和5年3月13日

ダイードリンコ(株)に感謝状贈呈



府内に設置された「緑の募金付き自動販売機」の売上に応じてダイードリンコ株式会社様からいただいた緑の募金に対し、感謝状を贈呈しました。

令和5年2月

(株)中央倉庫に感謝状贈呈

子どもたちへの森林体験学習のためにいただいたご寄付に対し、株式会社中央倉庫様に感謝状を贈呈しました。



令和5年4月19日

国際ソロプチミスト京都に感謝状贈呈

子どもたちの森林体験学習の趣旨にご賛同いただき国際ソロプチミスト京都様からいただいたご寄付に対し、感謝状を贈呈しました。



令和5年6月27日

令和5年度定時総会を開催

令和5年度定時総会を開催し、令和4年度決算及び役員の選任について承認されました。



緑の募金ご協力をお願い

緑の募金は、地域や学校の緑化活動や、未来を担う子どもたちの森林環境教育などに使われています。皆様のご協力をお願いいたします。

●郵便振替や銀行振込で

1. 郵便振替

00920-7-239523
京都モデルフォレスト協会緑の募金

2. 銀行振込 京都銀行府庁出張所

普通 3154305
公益社団法人 京都モデルフォレスト協会 理事長 安藤孝夫

窓口の利用で
振込手数料等が
免除されます



令和5年春募金実績



9,748,602円

ご協力ありがとうございました

●商品購入や募金箱で

「緑の募金付商品」を購入したり、各所に設置された「緑の募金箱」に直接募金することで、ご協力いただけます。「緑の募金付商品」開発・販売や募金箱の設置等、様々な形でご協力いただける店舗様、事務所様も募集しています。

会員PR欄

EIKOH
英興株式会社



京都府



京都府広報監事仲まろ

入会案内資料をご希望の方はご連絡ください。

発行: 公益社団法人 京都モデルフォレスト協会 〒604-8424 京都市中京区西ノ京樋ノ口町123 京都府林業会館3階

TEL&FAX 075-823-0170 E-mail kyomori@kyoto-modelforest.jp

URL https://www.kyoto-modelforest.jp facebook https://www.facebook.com/KyotoModelForest

